

Common Sense

2015年3月22日版

メール
マガジン

国際派日本人養成講座

国際交渉の現場から

「国際舞台において、日本人であることは、それだけで大きな強み」

1. 名古屋議定書を巡る 先進国と途上国の対立

「名古屋議定書 生物の多様性を守る出発点」と題した読売新聞 平成22(2010)年10月3日付け社説は次のように述べる。

名古屋市で開かれていた生物多様性条約の第10回締約国会議(COP10)は、「名古屋議定書」などを採択して閉幕した。急速に損なわれている生物の多様性を守ることは、世界全体の課題である。だが、保全のあり方に對しては、各国の利害が複雑に絡む。それを改めて浮き彫りにした会議だったと言えよう。その象徴が、名古屋議定書を巡る先進国と途上国の対立だ。先進国企業は、途上国原産の動植物や微生物などを製造するよう先進国に求めた。先進国から可能な限り多くの資金を引き出そうという途上国側の姿勢がだこう。

2. 「それはいい。喜んでやらせたい」

COP10は平成22(2010)年10月18日から2週間にわたり開催された。しかし、先进国と途上国の対立で最初の1週間ですでに暗雲が立ちこめていた。各国の実務レベルの交渉官の議論では話がまとまりそうもない。そう考えたKumiは、のちに「名古屋方式」と呼ばれる進め方の提案をした。それは大臣級の人々で、いくつかの作業部会で、アシリテーターとい

3. 「Kumiに任せれば大丈夫」

名古屋市で開かれていた生物多様性条約の第10回締約国会議(COP10)は、「名古屋議定書」などを採択して閉幕した。

依頼した大臣級の中には、今までの国際会議などで、すでにKumiが親しくしていた人も少なくなかった。非公式に彼らに直接コントакトをとり、○○大臣、お願いします」と軽み込んだ。

大臣級がアシリテーターに据えることのメリツ

トは、次の「一言」が出ることだった。「私は國を代表

して言いたいことはあるが、アシリテーターの任

を負っているから、この点はあえて我慢をして呑み込もう。なので、あなたもそこは理解してくれ

たせたのだった。

大臣級がアシリテーターをつとめる事で、まと

められなければ自分の手落ちになるし、うまくまと

めれば自分の手柄となる。そういう当事者意識を持

ていれば、争いはいつか必ず再燃します。どんな

ことがあって、議論が收拾しなかった。特にキューバ、

ボリビア、ベネズエラ、ニカラグアといった中南米

諸国が激しく反論を主張していた。

島田氏は、こう持ちかけた。

Kumiは語る。



名古屋議定書の主要な議論が採択され、ジョグラフ事務局長と握手する議長の松本環境相(中央)ら(共同)

藤沢周平の草稿、大量発見

期間中、さまざまのメディアに合意は困難と言わなかった。落としどころは、反対していたことはことだと思いません。

あなたは反対しない立場がない。私は決めないとならない。落としどころは、反対していたことはことだと思いません。

あなたは反対しない立場がない。私は決めないと

ならない。落としどころは、反対していたことは

ことだと思いません。

